

# 法の水茎 (57)

大正大学講師 高橋 秀城

寂しかった山間の地にも、光の春が巡ってきた。清廉な梅が香に誘われた鶯が、枝先で嬉しそうに囀っています。それはまるで、今年も艶やかな装いをして待つてくれた梅の木に、「ただいま」の挨拶をしているようです。

山里に住む甲斐あるは梅花



春を迎え梅などの花が咲き始める

見つけた鶯

聞くにぞありける (『貫之集』)

(山里に暮らす甲斐があるのは、咲き誇った梅の花を愛でながら、鶯の声を聞くことであるよ)

梅は、松・竹とともに「歳寒三友」(冬の寒さに堪える三種の植物)の一つとして讃えられます。厳しい季節にあっても気品を失わない梅の花に、私

たちは鶯と同じように心を奪われるのでしょうか。三月は「弥生」「花月」「花見月」とも呼ばれるように、草木が芽吹き、さまざまな花が咲き初める季節です。下旬にもなれば、桜の便りも気になるでしょう。

とにかくに

目かれぬものを 昼夜の 花と月とは

(『為家集』「彼岸」) (とにもかくにも目を離さないで眺めていたのに、昼夜が同じ長さの彼岸には、いつのまにか桜と月が近づいてきたよ)

この歌にある「昼夜の同じ時」とは、昼と夜の長さが同じになる、お彼岸(二月十七日から二十三日)の時期を指します。いつもは別々に鑑賞していた花と月も、今は満開の夜桜に、清かな春の月光が降り注いでいるかもしれません。それはまさに「桜月」にふさわしい春爛漫の光景です。

お彼岸の「中日」(二十日)は、国民の祝日(春分の日)です。昭和二十三年(一九四八)七月二十日に公布された「国民の祝日に関する法律」によれば、春分の日は、自然をたたえ、生物をいつくしむ。

(第二巻)

日と定められています。自然の息吹を全身に感じながら、身心を浄め、この世に生を享けた喜びを分かち合う折節でもあるのでしょうか。

自然を慈しむといっても、次のような愛で方には困ったものです。

昔、京都の七条通の南に輔親(九五四、一〇三八)という歌人が住んでいました。

春の初めのこと。軒近くの梅の木に、いつも十時頃になると鶯がやって来て鳴いていました。輔親は珍しいと思って、周りの有名な歌人たちに告げ知らせ、「明日の八時くらいにいらっしゃって、ぜひ声を聞きください」と触れ

回りました。その日、夜勤の武者には、「決して鶯を叩いたりして、追ひ払うでないぞ」と言うので、男は「そのようなことは、いたしません」と返事をしました。さて、いよいよ当日のこと。輔親は、いつもより早起きをして準備を整えます。八時頃になると歌人たちが集まり始め、今か今かと歌を詠み合っていました。その日に限って正午を過ぎてても鶯の姿が見えませんでした。

不審に思った輔親は、夜勤の男を呼び寄せ、「どうして今日はやって来ないのだ」と尋ねます。すると、男は「鶯はいつもより早めに来たのですが、帰ってしまいそうだったので捕らえておきました」と答えると、奥から木に縛り付けた鶯を持ってきます。嘩然とする男を前に、男は「昨日の仰せを受けて、もし逃がしてもしたら屈辱になると思いい、このように射落としたのでございます」と得意気に

## 折り折りの記 (91)

波多野 重雄

### 春場所の連続優勝うたがはず

三月十二日より、大阪場所が始まる。初場所では大関稀勢の里が横綱白鵬に勝ち、待望の七十二代横綱となる。大相撲は江戸の初期「勧進相撲」として寺社奉行の管轄下に置かれた。一九〇九年六月、両国国技館が落成し「国技」として一本化し(大阪・東京)、優勝制度を制定、戦後復員の栃錦と若乃花の栃花時代は日本の復興を象徴した。横綱の土俵入りは、十代横綱の雲龍久吉と十一代横綱の不知火光右衛門の「雲龍型」と「不知火型」となる。稀勢の里は雲龍型。難波の花を飾るだろう。(高尾山健康登山の会長)

(高尾山健康登山の会長)

## 百観音霊場巡礼 (22)

厚木市 荒井 一雄

### 春遊岩槻

夜禅 西下月

朝梵 未曙寺

深謝 味精進

廻池 思往事

この次は

いつ籠らんや慈雲寺に 個れたる池ゆ塔を望めり

春、岩槻に遊ぶ

夜禅(夜の坐禅)、西に下る月...

朝梵(朝の読経)、未だ曙けぬ寺...

深く謝して精進(料理)を味はひ、

池(の跡地)を廻り、往事(昔時)を思はん...

語ったのでした。

それは興ざめとも言えない程、本当に愚かな出来事でした。

(『十訓抄』)

男は、輔親の命令に背くまいとしていました。可愛らしい鶯を逃がしてはなるまいと、射落として手元に置くことを咄嗟に思いついたのでした。

男は悲むれもせず、「正しい」行いをしたと思ひ込んでいます。「愚直」と言えばそれまでですが、あれこれ思いを巡らす前に「命を奪う」「殺生」の罪を犯したことは、やはり「愚かな」行動であったと言わざるを得ません。

射殺された鶯は、どこへ旅立ったのでしょうか。もしかすると、故郷の山里に帰って行ったのでしょうか。

呼子鳥

憂き世の人を 誘ひ出でよ

入於深山 思惟仏道

(呼子鳥よ、苦しい世に

## 前貫首・山本秀順大和尚ご命日

また吾隆の 勇猛精進し、 深山に入りて 仏道を思惟するを



一月四日は、前貫首・山本秀順大和尚の御命日であります。歴代先師墓地において、懇ろに御回向を致しました。

大和尚は平成八年二月四日、世寿八十四歳にて御遷化されました。

立春を迎えて寒さの中にも春の日差しを感じる中、亡き大和尚の御冥福を祈り、墓前に香を手向けました。